

298. 平成12年度滋賀県下における 発掘調査の紹介(その3)

19. 最古級の前方後方墳

能登川町 神郷亀塚古墳

神郷亀塚古墳は、能登川町大字長勝寺に所在する。従来は前方後円墳とされていたが、町内遺跡詳細分布調査の範囲確認で、周囲の水田下から周濠が発見され、全体の形が前方後方墳であることが判明した。



神郷亀塚古墳(南から)

平面は前方部の先がやや開き、後方は後ろの端が開いて逆台形になる。周濠は両側面の幅が12mあるが前方部に向かって狭くなり、正面で2mとなる。規模は、全長が35.5m、全幅は後方で25mである。高さは、現況の地表面から3.6m、濠の底から4.8mを測る。葺石はないが、墳丘盛土の状態から2段築成の可能性がある。後方部の約7×5mの範囲で、墓坑の線を検出し、外郭に堅い黄色の粘土を積み上げて墓坑を構築している可能性がある。ただし現段階では、棺の形態など埋葬施設本体の詳細は不明である。

主体部に後世の攪乱は認められない。土器は墳頂表土の約60cm層には一切含まれず、墓坑埋土から100点余り出土した。これらは墳頂部での葬送儀礼など祭祀行為に用された後、破砕されて墓坑に埋められた可能性が高い。時期的には斗西1期と2期古段階(弥生後期

後半～庄内式併行古段階)に比定されるものである。また墳丘の形態的特徴では、初源期のものとみられている愛知県西上免遺跡SZ01と類似点が多く、出土土器の年代も符合する。以上のように墓坑出土土器、および古墳の形態的特徴など現段階の資料からみて、築造時期は3世紀前半代に比定できる。

平野部の前方後方墳では、全国的にも高塚をもつ例は極めて稀少で、初源期のものとしては唯一である。弥生時代では、方形周溝墓など低墳丘墓が築造されるが、当古墳は低塚から高塚古墳へ移行する過渡的な様相を如実に示し、古墳の発生を考える上で極めて重要な情報をもった遺構である。また、平野部で発見されている既往の前方後方周溝墓の構造についても再検討をせまる資料となり、さらなる追究が期待されている。

(能登川町埋蔵文化財センター 植田文雄)

20. 絹糸で飾られた黒漆塗り木盾が出土

能登川町林 石田遺跡

石田遺跡は能登川町のほぼ中心部に位置している縄文時代後期、弥生時代後期から古墳時代初頭・中世の集落跡である。発掘調査は、能登川駅西土地区画整理事業に伴う道路・保留地部分の調査を平成10年度から実施している。

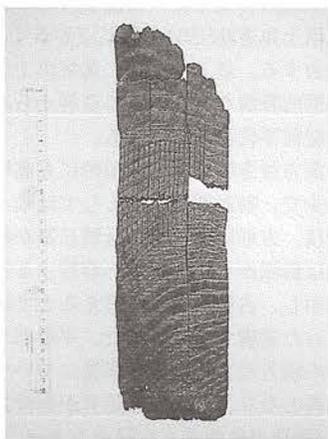
今までの調査では、弥生時代後期の河跡、環濠、掘立柱建物などが検出され、大量の土器や木製品とともに、木製品・青銅器生産関連遺物などが出土している。石田遺跡の性格としては、湖東地方の拠点集落である中沢・斗西遺跡の分村的な性格を持つ集落の一つであると考えられ、琵琶湖(内湖)に接していることから、湖上交通の窓口的な集落であったと考えられる。

今年度の調査では、集落の中心部分を流れていた河跡から、大量の土器や木製品とともに、絹糸で装飾された黒漆塗りの木盾(4世紀後半)が出土した。表面の綴じ糸の間隔が非常に細かく(約3～5mm)、凹字形の幾何学模様を繊細に表現している。漆も油煙または松煙などからなる精練されたものを使用しており、戦闘などに用いた実用品よりは装飾品と考えられる。当時の工芸技術を考える上で、また、古墳に副葬される「漆塗り革盾」や盾形埴輪の文様系譜を考える上で貴重な資料である。

昨年度に実施した遺跡範囲確認調査では、河跡(木

盾の出土した河跡の上流)から馬鍬が出土した。今年度保存処理が完了し、一般に公開した。発見された馬鍬は、台木に歯が埋め込まれた状態で歯が7本残っており、クサビで留められている。周辺で出土した土器(4世紀末～5世紀初頭)から国内最古のもと考えられ、当時の農耕技術を考える上で貴重なものである。

他に、両手をあげた土偶(高さ5.1cm・縄文時代後期前葉)が出土している。



絹糸で飾られた黒漆塗り木盾

(能登川町教育委員会 杉浦隆文)

21. 栗太郡衙の区画溝を調査

栗東市下戸山 岡遺跡

岡遺跡は昭和61(1986)年度の圃場整備事業にともない確認された遺跡で、区画溝を伴う大規模な建物群が計画的に配置される様子が明らかになり、近江国栗太郡衙と確認されている。

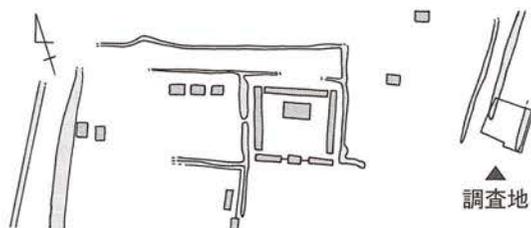
中心部の郡庁とその西側は地下保存されているが、名神高速道路を挟んだ東側については開発に伴う発掘調査を実施している。今回の調査は宅地造成に先立ち765㎡の面積で実施した。検出した主な遺構は南北方向の区画溝2条と土坑墓1基である。

調査区西端の溝1は、平成6年度に滋賀県教育委員会により、本調査区北側で確認された郡衙東端を区画すると推定された溝の続きで、本調査区内で途切れている。規模は幅3m、深さ0.7mで、逆台形に掘られている。溝の底からは7世紀後半の須恵器杯身が出土した。転用硯である。溝は8世紀前半頃には中程まで埋まりその後人為的に埋め戻されている。

溝2は溝1から東18mに平行して掘られている。規模と形態は溝1と類似する。調査区の南端で幅と深さを限じているためやはり途切れるようだ。遺物は9～10世紀の灰釉陶器が出土したため郡衙廃絶期の区画溝と考えられたが、中世黒色土器が混入しており時期決

定には至らなかった。なお、この溝の底部には地山を掘り残した幅0.5m、高さ0.3mの畦状のものが溝に直交して設けられており、水量調整が為されたものと考えられる。

その他、埋没した溝1の上から円形の土坑が掘られている。直径1.3m、深さ0.5mで、10世紀後半の須恵器が埋納され、蓋をするように石が2個置かれていた。状況から骨壺を埋納した土坑墓と考えられる。



遺構配置図

(助)栗東市文化体育振興事業団 佐伯英樹)

22. 弥生時代後期の土坑群や河川、溝を調査

栗東市十里 十里遺跡

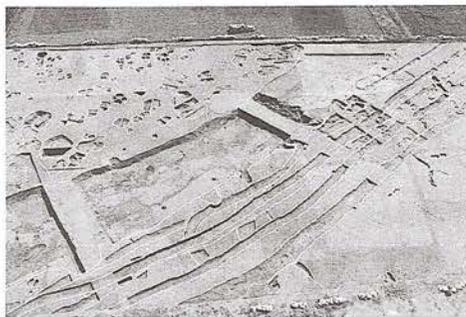
十里遺跡は栗東市域の北西端部に立地する。最も琵琶湖に近く、標高は89m程である。これまでの調査では弥生時代後期の方形周溝墓や古墳時代から平安時代にかけての集落が確認されているほか、昨年度には市道新設の調査で飛鳥時代の区画溝から斎串と共に「道師」のほか「乙酉年4月1日」(685年)の紀年名木簡が出土し注目された。しかし、広範囲の調査は実施されておらず、その具体的な様子は解明されていない。

今年度の調査は住宅建築に先立ち面積2,500㎡で実施した。確認された遺構は、近代の土取り坑以外は弥生時代後期後半に限定される。調査区の中央を東から西へ河川が流れ、その河川を挟んで南側に土坑群、北側からは溝が十数条検出された。

河川は幅8mから6m、深さ1.3m。下層の砂粒層などから弥生土器のほか建築部材、鍬の泥除け等の農具が出土した。

土坑群は数十cmから数mのもので、約160基検出された。径1.5m前後の円形の土坑からは炭層と共に甕や鉢が出土しており調理用の土坑の可能性もある。不整形のものは粘土の採取坑等が考えられる。

溝は幅0.6～1m、深さ10～20cmの規模で、河川と平行して掘られた6条の溝には、人の足跡のほか三日月形の痕跡が多数残存していた。溝の掘削時についた農具の痕跡と考えられる。



遺物主要部分

(財)栗東市文化体育振興事業団 佐伯英樹

23. 室町時代の鉄製品生産関連遺物の発見

栗東市林 林遺跡

林遺跡は、野洲川によって形成された扇状地の上部に位置し、遺跡の南側には東海道が東西に通過する。また「大塚」、「車塚」など塚の地名がいくつか残っており、埋没した古墳の存在が推定されている。



作業風景

今回の調査は、町道路建設に伴うもので、約3,000㎡を調査した。確認された遺構、遺物は、おおむね4時期に区分できる。1期は縄文時代で、明確な遺構は確認できなかったが、縄文土器小片と打製石斧が出土している。2期は古墳時代から飛鳥時代で、竪穴住居や土坑が確認されている。竪穴住居は、一辺が約5mの方形プランで、北辺右隅にカマドを持つ。明確な支柱穴はもたないが、壁溝中に小ピットが存在することから柱穴の役割を果たしていた可能性がある。また西側半分の床面が一段下がっており、通常よく見られる住居とはやや異なっている。時期は、出土した須恵器より7世紀後半と考えられる。3期は奈良時代から平安時代で、掘立柱建物、土坑、溝、河道などが確認されている。この時期は、西端の調査区で掘立柱建物や土坑が確認されている程度で、大半の調査区では溝、河道の確認にとどまった。4期は室町時代以降で、3期に溝や河道であった場所が埋まってから集落が形成される。掘立柱建物は10棟以上確認され、切り合い関係

や埋土の違いから少なくとも2時期以上存在する。土坑は、一辺約2～3mのものが一定の間隔をおいて規則正しく配列されている。遺物で注目されるのは、鉄滓、炉壁、フイゴの羽口などの鉄製品生産にかかわる遺物がまとまって出土したことである。「高野郷字ウハウソ田地売券」(天文2年=1533年)の中に、林の「いわいづか」鍛冶、了道・二郎左衛門父子と記されていることから、調査区周辺から出土した鉄製品生産遺物と文書の間係を知るうえで貴重な資料となった。

(財)栗東市文化体育振興事業団 近藤 広

24. 天主台の発掘調査

安土町・能登川町 特別史跡安土城跡

平成12年度は昨年度に引き続き、主郭部の中心である天主・本丸・三の丸などを調査対象地として、発掘調査および測量調査を実施した。

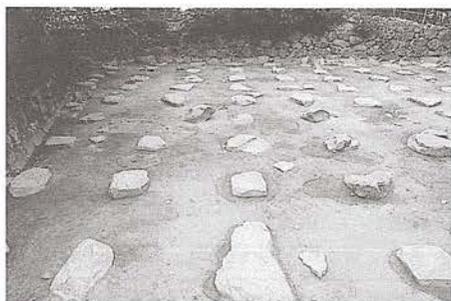
天主穴蔵では昭和15年の調査時に検出されていながら、その後の堆積で埋没した礎石と床面の再検出を全面で行った。その結果、現地表面から1～20cm下で昭和17年刊行の報告書の記載どおり、叩き漆喰面が存在することを再確認した。しかし、叩き漆喰面は報告書の記載のように穴蔵内全面で検出したわけではなく、むしろ天主台の造成土と考えられる黄褐色系土の部分が多く見られた。

床面上では多数の遺構を検出した。礎石には本柱礎石と考えられる大型のもの、その礎石列の軸線からややずれた位置の小型礎石がある。今回新たに15個の小型礎石を検出したが、昭和17年刊行の報告書の平面図に記載されている19個の小形礎石の中で現存しないものが4個ある。また小形の円形もしくは楕円形を呈する小形遺構の掘り込みを一部で行ったところ、大部分は樹根等による攪乱であったが、一部に浅い皿状の遺構があった。これは形状や検出された位置から小形礎石が抜けた跡であると判断できる。これらの遺構以外にも床面上では多数の遺構を検出したが、その多くは現代に属する遺物が含まれている不定形な土坑であった。

また昭和15年度に調査された穴蔵中央の穴を再調査した。調査の結果、報告書では窺えなかった穴内部の形状が判明したが、埋土は全て昭和15年の調査後埋め戻されたもので、さらに穴の上半部は昭和15年以降に攪乱を受けていることから、穴の機能を推定するには至らなかった。しかし穴の下半部は地山の岩盤層に掘り込まれていることから、天主台は基本的に地山成形によって造られていることが新たに判明した。

ところで先述のように床面の下の造成土と考えられる土が多数露出していること、また数多く検出された現代の遺物を含む遺構の存在は、この60年間に保存す

べき遺構の破壊が進んだ結果として捉えられる。この事実は、遺構の保存と活用の両立の難しさとともに、保存に伴う維持管理の重要性を改めて考えなければならぬという問題を、我々に投げかけているのである。



天主台西半の遺構検出状況

(滋賀県安土城郭調査研究所 岩橋隆浩)

25. 溝で区画された鎌倉時代の集落を検出 草津市 宮前遺跡

宮前遺跡は草津市川原町に所在し、弥生時代～中世の遺跡として知られ、今回大津湖南幹線都市計画街路整備事業に伴い発掘調査を実施した。調査の結果、調査区全域に鎌倉時代の遺構がみられ、溝26条・掘立柱建物27棟・土坑10基・井戸6基・自然流路2条を検出した。



掘立柱建物内側の土坑

26条の溝の内、2条は幅2.0m以上、深さ80cm以上ある区画溝で、条理方向に沿って方形にまわるものである。これら2条の溝を境に掘立柱建物の棟数に極端に違いがみられたり、遺構の分布密度が低くなる部分があった。

27棟の掘立柱建物の内、2棟の掘立柱建物の内側(屋内の壁際)に浅い方形の土坑を伴っており、土坑の中には焼土や炭化物の広がりが見られた。このような位置関係や遺構内の内容物等から、これらの土坑は、竈のような屋内で火を使う施設の可能性があると考えられる。

調査地は宮前遺跡の範囲外にあるが、今回の調査成果により遺跡の範囲が東方に広がることが確認され、

また今後の調査によって今回確認された集落の広がりが見られることが期待される。

(助滋賀県文化財保護協会 重田 勉)

26. 前年度に引き続き寺院関連遺構を検出 多賀町 敏満寺遺跡

敏満寺遺跡は、名神高速道路多賀サービスエリアが位置する丘陵の標高140m付近に広がる遺跡で、中世の寺院跡を中心とする縄文時代から室町時代までの複合遺跡である。発掘調査は、下り線多賀サービスエリア改良工事に伴い平成9年度から実施しており、これまでに約15,600㎡を調査し、室町時代の寺院関連遺構などを確認している。



調査区全景

今年度の調査は、当事業の最終年度にあたり約2,500㎡の調査を実施した。調査成果としては、これまでに引き続き、室町時代の掘立柱建物・竪穴建物・井戸・溝・土坑などの遺構群を伴う区画(地山を掘削して作った平坦面や溝などにより区切られた平坦面)を9区画確認した。特に、今回の調査においては、東向きの斜面を2mほど掘削して作り出した20m×14mの規模を測る区画などが、雛壇状に造成されている状況を把握することができたほか、調査区の北端に近い部分では、敏満寺における寺域の北限を示す土塁と溝を確認することができた。土塁と溝については、尾根を横断する方向に設けられた幅7.6m(内土塁幅約4.5m・溝幅約3.1m)・高さ約2.2m(土塁と溝を含む)を測るもので、ここから敏満寺の中心部分と考えられている胡宮神社付近までは、約700mほどの距離がある。

他の時期の遺構については、縄文時代の土坑、弥生時代の住居や奈良時代の炭窯を検出した。炭窯については、室町時代の遺構により半分程度が壊されていたが、全長約10.9m・幅約0.7mを測るもので、前年度に確認した炭窯とよく似た構造のものであると考えられる。

(助滋賀県文化財保護協会 中村智孝)